

宍道を訪れた旅人伝



発刊にあたって

宍道その地名伝承が「道」に関わるだけではなく、古くから交通の要衝として知られる地域でした。風土記の時代には古代の官道がとおり、中世には湖上交通の基地として、また、江戸時代には本陣宿を持つ宿場町として整備されてきました。

明治・大正・昭和時代になると鉄道や道路、航空路が整えられ、さらに、自動車尾道松江線でも山陰と山陽を結ぶ高速交通網の分岐点としての役割を果たしています。

今回のふるさと文庫では交通の要所、宍道を訪ねた旅人にスポットをあててみました。それほど多くの記録が残されているわけではありませんが、時代を超えて人、物資の行き交った宍道の地は、人々の記憶にその時々の印象を残しているようです。

本書の作成にあたり、快くご執筆いただきました内田文恵、野津千恵子両氏には心より感謝するとともに、本書をとおして宍道の宍道らしさに思いを馳せていただければ幸いです。

宍道町教育委員会

目 次

	ページ
第一章	2
内山 真龍 (うちやま またつ)	2
泉光院野田成亮 (せんこういん のだ しげすけ)	3
頼 杏坪 (らい きょうへい)	6
広瀬 旭荘 (ひろせ きょくそう)	8
物外 不遷 (もつがい ふせん)	12
西園寺 公望 (さいおんじ きんもち)	14
田山 花袋 (たやま かたい)	16
河東 碧梧桐 (かわひがし へきごとう)	18
独楽窩を訪れた人々	21
参考文献	23
第二章	25
田能村 直入 (たのむら ちよくにゅう)	25
東郷 平八郎 (とうごう へいはちろう)	27
小汀 利得 (おばま としえ)	32
棟方 志功 (むなかた しこう)	34
松本 清張 (まつもと せいちょう)	36
第7回日展松江会場と橋本明治、小糸源太郎、 徳岡神泉、澤田政廣	38
参考文献	40
第三章	41
日間瑣事備忘 (抄) 広瀬 旭荘	41

はじめに

昔の旅と、今の旅ほど違うものはありません。今は自分の足で歩かなくても、旅ができる時代です。車、電車、飛行機などあらゆる交通手段があって、どこでも、いつでも自由に行き来できるのですから。

昔、宍道を訪れたり、通り過ぎた旅人は、歩くか、宍道湖を使った船便でした。それでも、汽車が通るようになり、国道が整備されるにしたがって、その様子も違ってきました。江戸時代の人には徒歩、たまに渡舟の人もいました。明治時代初期は汽船、それから、汽車に移って、次に車、電車の時代になって行ったのです。

これから、宍道を訪れた旅人を紹介してみます。おおまかに、三章に分けました。一章は江戸時代から、明治初期の人です。旅日記をつけていて、そのなかで宍道の記述があった人。または、木幡家の山荘独楽窩を訪れた人。二章は主に、明治時代から昭和にかけての人で、木幡家に来訪の記録が残されていた人々です。

三章は江戸時代の漢詩人、広瀬旭荘の旅日記『日間瑣事備忘』^{にっかんさしびぼう}のなかから宍道の箇所を取り出したものです。この日記は漢文でかかれていますので、それを読み下し文にしたものです。1854年、江戸時代末期ごろの宍道の町のようによく書かれています。

第1章

* 内山 真龍（うちやま またつ）

元文5年（1740）～ 文政4年（1821）

天明6年（1786）正月21日 遠江国豊田郡大谷村（現静岡県天竜市）を出発した五人の男達がいました。餌袋を背負っての旅たちだったと日記の始まりに書いています。



内山真龍自書並歌

五人の男達がめざしたのは出雲国。この旅行記『出雲日記』を書いたのが内山真龍です。同行した四人は真龍の門人だったと思われます。出雲国への旅の目的は「出雲国風土記」について書物で学んでも、疑わしいところがあるため、それぞれの社へ詣で、いまの変わ

った様子を自分の目でみ、見聞する事だったので。

真龍は大谷村の名主で、賀茂真淵に学んだ国学者として知られた人でした。俳諧連歌にもすぐれ、農事のかたわら学問に精を出し、古典

を研究し、近在の人々を教育して、門人の数は135人におよんでいます。それまで、神官層や、一部の町人層にとどまっていた国学を郷村内部まで発展させ、遠州国学の基礎をきずいた人でした。

真龍は国を出てから、三河、尾張、美濃、近江、山城、摂津、河内、播磨、美作の国を通して、伯耆国に入り、2月15日に出雲と伯耆の国境の弓が浜に宿り、翌日、出雲に入っています。この日、2月になって初めて雨にうたれての歩きでした。

「16日、出雲江（郷）の意宇川のほとりの宿に泊まり、17日も雨はしばしば降りて、ものうし」と書いているように雨のなかの出発でした。

「空晴やかにて、玉造、乃木、来海の海べを行、沖なる細引釣船を見て、此のうみはよ（世）の所よりはめてたき神代の伝へもありて、あまのわざも貴し」

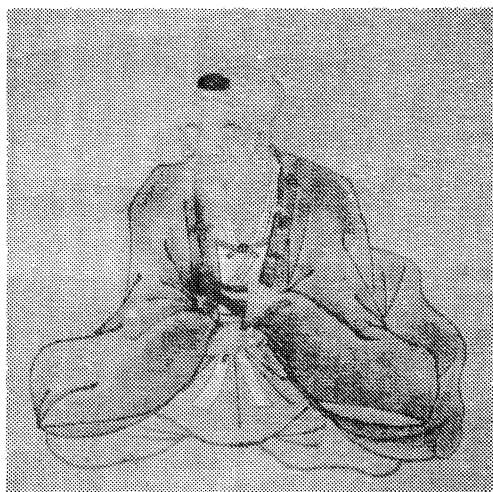
真龍は宍道湖岸をあるき、湖をみて、釣人のようすをこのように、書いています。

23日には杵築の社に着いていますから、宍道のまちを歩いたのは何日なのかははっきりしませんが、宍道湖岸に行く道中は雨もあがってよい天気だったようです。

*泉光院野田成亮（せんこういん のだ しげすけ）

宝暦6年（1756）～天保6年（1835）

文化14年（1817）4月22日、その日は曇り空でした。前日には大雨が降りひどく歩きにくい道中だったため、市中を托鉢して歩き出した



泉光院の肖像

には巳の刻、今の午前11時ごろだったのです。托鉢の後、菅原天神へ向いました。「この間二里、山坂おおく至って道悪し、菅原村屋過着」

この市中とはおそらく、宍道の町中ではなかったかと思います。前日は三刀屋の峰寺にいています。菅原天神では、社司の菅原和

泉正が迎えてくれ、納経印形がすむと、社司に、この村で一宿するようすすめられ、松右衛門という者の家に宿します。

夜、和泉正が訪れ、話はずみます。菅原天神の由来や、鼻繰り梅のはなしなどを聞き、天神誕生の地の縁起書などをもらっています。和泉正が山崎闇斎の垂加神道のことや、中臣祓七ヶ伝などを知らないというので、伝授したところお礼に、布の葉一包み^めを贈られた書いています。

この里はむかし、山田の里といていたのが菅原道真誕生のあと、菅原に改め、今もふしぎな事が多くあり、なかでも、鼻繰り梅はこの地以外に植えるとふつうの梅になるという^{あまみてる}と書いて、「天満神垣涼し松の月」の句を、奉納しています。

翌23日、菅原の地を、朝辰の刻、今の午前9時ごろに出立して玉造に向かいました。

この日記『日本九峰修行日記』を書いた泉光院は、文化9年（1812）9月3日、日向国佐土原を出発し、以来、日本中を回国^{かいこく}している修験者、つまり、山伏です。

泉光院は出発したとき、56才でした。それから、6年2ヵ月の修行の旅を続け故郷に帰っています。供をしたのは、荷かつぎの平四郎という34才の男一人でした。

托鉢をしながら、木賃宿^{きちんやど}や、旅籠^{はたご}にはめったに泊まらず、大部分農家に頼んで泊めてもらい、渡し船を利用する以外、乗り物にも乗らず、すべて歩き続け、それも人通りの多い表街道はなるべく避けて、農山村地帯の裏道にそって小さな村落ばかりを歩いたのです。

一日も欠けることなく、日記を書き、参詣した寺社、宿泊した村と泊めてくれた人の名、通過した土地の名、もらった品名、数量など克明に書いています。この日記は、江戸時代の庶民の暮らし、日常がうかがいあがってくる貴重な記録とされています。

托鉢をしつつ旅をする泉光院は、日向国安宮寺という山伏寺の住職であり、修験者としては最高位の山伏でしたから、本山と主君以外になんの遠慮もいらない高い地位の人物だったのです。

* 頼 杏坪 (らい きょうへい)

宝歴6年(1756)～天保5年(1834)

頼山陽は日本史上、儒学者、詩文家として大変著名な人物です。その著『日本外史』は鎌倉幕府依頼の武家政治を批判し、のち、幕末の王政復古の思想を誘発したといわれます。『山陽詩鈔』『日本楽府』は、日本漢詩上、最高傑作とされる作品です。



頼杏平画像

このような逸材を生んだ頼家は、安芸国浅野家につかえた儒臣の家柄でした。山陽を中心にして、両親、叔父、子供とそれぞれ学者、詩文家、思想家

として著名な人物で、後世に名を残しています。父は学者として有名な春水。母静子は、春水に嫁いでから死にいたるまで書き綴った日記、遊記などが貴重な文献といわれる名文家でした。叔父に春水の次の弟春風、末弟が杏坪。山陽の息子で祖父春水の養子となって、頼家を継いだ隼庵、次男が幕末明治の儒学者として知られる支峰、三男は幕末の志士として、父山陽の思想を継いで幕府に抵抗し、安政の大獄で死罪になった三樹三郎です。

杏坪は、甥山陽の教育に力をそそぎ、実質的に山陽の学問、思考を育てた人でした。彼は18才のとき大阪に遊学し、のち、兄春水とともに、江戸で学び、30才で広島藩の藩儒となります。兄春水は学者肌の

かたい人物でしたが、杏坪は豪放磊落な人柄で、人望もある人でした。江戸にいる兄にかわって山陽の教育にあたるとともに、ややもすれば軌道を逸した行動をとる天才山陽のよき理解者でもあったのです。

晩年、学問所の勤めから郡方役所勤めに変わり、三好郡代官になります。この代官の時代、杏坪は「あしのけ」今の脚気を患いました。文政3年（1820）、療養のために温泉津温泉へ湯治にでかけました。その旅日記が『しほゆあみ之記』です。

3月28日、足を病んでいるため、つりこに乗って、従者を3、4人つれて出発しました。杏坪はこのとき64才でした。縁井、八木、可部、吉田、油木をへて、三井原、八川、横田、三所、八代、佐白と奥出雲を旅して、大東から玉造を通して4月5日、松江に入ります。松江では、八軒屋町に宿をとり、道光上人や、松江の文化人、小豆沢常悦らと親交を深め、宍道湖ぞいに松江めぐりなどをしたのち、7日に松江をたって出雲大社へ向かいました。途中、宍道を通ったのです。

「七日、松江をたちて、湖の南面を西に行く、宍道といふすくあり。

風土記を考るに、大己貴命ししをひ給へりし道なれば、かくは名つくめる。昔は大なる石もて造れる御姿もありしよしなり。向ひの湖辺に、市はたの薬師とて眼をやむ人々遠近より（まの欠か）ねきまいるあり。」

風土記の古事を引用して、宍道について書いています。杏坪は実際、この大石を見たのか、見たとしたら、石宮神社の巨石なのか、今、保存が問題になっている白石の夫婦岩であったのかわかりません。村名

が記してあったならと残念です。

杏坪の一行は、宍道から直江、今市、大社へ行き、石見路へ入って、湯治場へ向かったのです。

* 広瀬 旭荘 (ひろせ きょくそう)

文化4年(1807) ~ 文久3年(1863)

広瀬旭荘は、江戸時代後期の詩人、儒者として有名な人です。豊後国日田に生れ、兄は詩人、儒者として高名な広瀬淡窓です。旭荘は長兄の淡窓の指導をうけ、その後、著名な儒者、詩人に師事していますが、そのなかには詩人の菅茶山もいます。



文敏先生肖像

明治二十有二年七月五日

三月海西湯治場文敏先生肖像

広瀬 旭荘

豊後国高田で塾を開き、天保2年(1831)には、兄が開いた塾、咸宜園かいぎえんのめんどろを見たりしますが、その後は諸国を漫遊し、堺で開塾、さらに肥前国大村藩主に仕えます。しかし、また諸国漫遊に出かけています。

この二度目の漫遊のとき、出雲を訪れたのです。時は、嘉永7年(1854)9月8日でした。津山、倉吉をへて、出雲国に入っています。

10月5日、旭荘のもとで学んでいる大坪大輔の父、行蔵がぜひ宍道に来てくれるようにと招きました。この間のようす、宍道でのことが、旭荘の日記『日間瑣事備忘』^{にっかんさしびぼう}に記録されています。

行蔵は隠岐へ行くより宍道、今市、杵築方面に行くほうが詩酒風流のおもむきがあってとてもいいし、宍道の者が先生の来訪を渴望していると熱心に請うたので、7日、宍道に向かうことになったのです。

その日は暖かく、気持ちのいい日でした。従っている人が船で行くことを勧め、宍道湖へ乗り出します。松江城下の町が湖にのぞみ、青松が聳え、紅葉の錦がつらなる美しい風景をみながら船は進んでいきました。途中、土地の人が赤壁と呼ぶところが見えます。これは浜佐陀附近の十六ハゲと呼ばれているところです。ほどなく日没になり、西の雲は明るく、東の雲は陰のごとく、湖面はむらさき、或いは黒く、山々は緑のようであり、あるいは黄色のように見え、山は高く、水は潤い、琵琶湖にまさる景勝をながめつつ進むうち、かるい睡魔を旭荘は覚えたのです。そのとき、宍道に近くなり、すでに黄昏のなか、人家400余りの宍道の岸に着きました。大坪行蔵が提灯をかかげてむかえに来てくれていました。新築の大坪邸は垣根も壁も清く、清潔で、その夜の膳は豊富な食材ながら、簡潔に仕上げられたおいしいもので皆が喜んだのです。ここで、大坪行蔵の妻を紹介されています。

あくる日は、大坪家の西隣の宍道の名望家木幡久右衛門宅へ招待されます。久右衛門は字が伯要、号を梅屋といいました。梅屋の勧めで山荘へ行くことになりました。

午後2時ごろ、行蔵、秋香、通玄とともに梅屋の別荘へ向かいました。初めて湖上を見ると、空は晴れ、風は穏やかで、春のようにゆったりと、和やかで、湖と山が互いに連れ添っているかのような風景を目にしたのです。

途中、行蔵はかってここは湖で、今も貝殻などが土の中のにこっているが、今では田となり、大きな木が垣根のようにになっているなどの説明をしています。やや小高い所に別荘はあり、門の中に一軒の農家がありました。これは別荘の管理をする者の家なのです。

孟宗竹にかこまれた茅ふき屋根の山荘前に主人、梅屋が出迎えに出ていました。梅屋は年の頃、三十四、五才で、つつしみ深い様子ながら、賢さがかんじられる人物でした。質素な服装の主人に茶室に招じられました。茶室の前には池があり、池の上は樹々の緑におおわれ、中に黄葉がみえ、この上なくうつくしいさまです。池にながれる少しの水は石の割れ目から注いでします。雨がそうそうと流れるような音が聞こえるのでした。

庭を散策するなかで、旭荘は「南無阿弥陀仏」と彫られた石碑を目にしました。このいわれについて、行蔵が話すには、文化11年8月6日のことでした。当時、自分は十五才でよく覚えています。98人の実道の人々が湖の北にある薬師祭（一畑薬師）に出かけたところ、風はやんで、波もおだやかだったにもかかわらず、舟の底から漏れだし、船頭が衣服を脱いで穴をふさいでも、板がすでに腐っていてどうにもならず、乗っている人々は大騒ぎになり、ついには、数人が助かった

だけの惨事になったのです。この事故の慰霊の石碑なのです。それから、30数年たっても宍道のひとたちは、8月6日には湖には出なくなりましたが、今は少しずつ出かける者もいるようになっています。と語ったのです。

山荘の山の入り会いから宍道の人家は帯のように見え、西の湖の端は、広々とした平地が広がり、新田のように見えました。行蔵がこの地にむかし、瑞雲寺という寺があったのですが、^た廢れてしまい、以来、二百年、木幡家に属しているのですと話す、旭荘は世間には^{すぐ}勝れたところを、仏所のよりどころとするものだけれど、一つの家だけが仏所をよりどころとしているなど愉快的話だと感想を記しています。

再び、茶室に帰り、この茶室が、梅屋の高祖父夫妻が隠居所として建てたものであり、その高祖父夫妻がともに、百才にならんとする年まで長寿を保って、壮健だったので、時の藩主（6代宗衍）がここを訪れ、夫妻に接見したこと、また、その高祖父が没したとき、賜り物をしたことなどの話を聞いています。

こうして、閑静な山荘で半日をすごした旭荘は大坪邸に帰りました。翌日の9日、梅屋が尋ねてきます。旭荘は昨夜、このうえなく美しい笛の音を聞いたので、それはだれが吹いていたのかと、聞くと、行蔵が、それは隣の主人ですという。行蔵も梅屋の笛を聞いていないので、今日は笛を聞きに行きましょうということになり、梅屋とともにふたたび、山荘に行き、食事をごちそうになりながら、笛を聞き一日を過ごしたのでした。

そして、10日、また、梅屋も大坪邸にやってきましたが、行蔵が今日は、風もなく船頭に命じて、舟をだすように言ってあるから荘原へ向かいましょうという。午後大坪邸を辞して、梅屋や大坪氏の一族の内記などに見送られて、舟に乗りました。曇り空で、東から微風も吹いていました。この舟が小さい渡し舟のようだったのに、船頭が帆をあげないので、旭荘は不審に思って、船頭に聞くと、あなたが貴人なので帆をあげるのを喜ばないと思い、櫂を動かすだけなのだと言う。波がややわきあがったように思え、昨日聞いた溺死者の話しなどを思いだし、同乗の者が恐れたりしたのです。

このように、大坪氏宅で三泊し、木幡家の山荘で二日を過ごした旭荘は、宍道をあとにしました。

* 物外 不遷（もつがい ふせん）

寛政6年（1794） ～ 慶応3年（1867）

拳骨和尚と呼ばれた、江戸時代後期の曹洞宗の僧、物外は、伊予国松山藩の下級武士三木平太夫の子として生まれましたが、6才のときに剃髪し、仏門に入ります。越前の永平寺での修行をはじめ、全国の各寺院を転々として修行をし、尾道の済法寺の住職となりました。物外は住職として、寺院を整備するかたわら、不遷流武道の教授を勤める武道家でもありました。怪力の和尚として知られ、拳法、柔術、剣術、鎖鎌、槍術にも勝れていました。そのうえ、俳句、書画にもたくみで、各地に逸話を残した有名な人物です。勤皇の志士たちとも交遊



瓢筆の句画

があり、国事に奔走しましたが、74才で大阪の旅宿でなくなっています。物外とは、あらゆる世俗の物事から超越した絶対の境界という意味があります。

物外の逸話に、人が書画を頼むと、かならず、木版に刻んで、その後、拳骨で、痕を作って、落款に代えたなどの話が残っています。

この物外が、文久元年(1861)の冬、木幡梅屋をたずね、山荘独楽窩を訪れています。一時期、杵築大社に住したことがあると伝えられていますから、その際、山荘へ来たと思われます。物外の俳句が残されています。

『文久元酉の半冬、独楽窩に登りし時、木幡梅屋居士のもてなし厚く、庭前の風景一谷の瀧池、四季草木なかなか言の葉に尽しかたし

六十七歳 物外道者 備後済法寺住

花守と人はいふらん庵ひとり
 世を背に独り楽しむ蓮の花
 瀧の音とめてなきけりほとときす
 口きりや琴をしらへる峰の松
 瓢筆は鬼ころしなり有米の花』

* 西園寺 公望（さいおんじ きんもち）

嘉永2年（1849）～ 昭和15年（1940）

慶応3年（1867）に大政奉還となり、松江藩も幕府にならい、朝廷



明治維新前の西園寺公望

側に恭順の意をしめしました。翌、慶
 応4年1月、山陰道鎮撫使として、西
 園寺公望を総督にした一行が来ること
 になりました。これは、同年1月に起
 こった戊辰戦争に際して、大政奉還は
 なったものの、不穏な各地を鎮撫す
 るため、派遣されたものです。松江藩は
 幕府の親戚にあたる、親藩であること
 から、恭順の態度が疑われていたこと
 もあるうえに、藩側の事前の対応のま
 ずさもあって鎮撫使一行から、難題を
 出され、あわや、藩の国家老切腹とい
 う事態が起ころうとしていました。

鎮撫使一行の主力は、薩摩、長門の
 兵がしめ、それに、鳥取藩士が加わっ

ていましたから、松江藩にとっては、四面楚歌の状況だったのです。
 それでも、家老切腹のことは一行が松江に入る前に解決し、あとは、
 事なく一行が、藩外に去ってくれるように図ることでした。

そのために、藩をあげての歓待と細心の注意が必要だったのです。

「聞き書きふるさと西来待」には当時を体験した曾祖父や、祖母に聞いた話として逸話が書かれています。

それによると、街道筋は清掃され、錦の御旗に触れては大変と、松並木も道にかかる所の松は幹から切られたりしましたし、一行が通過するとき、沿道の住民は送迎に出かけ、宿舎は町内の大家があてられ、接待は町をあげておこなわれたのです。

宍道町には3月4日、大社に参拝しての帰路やってきました。町内の本陣や大家に別れて宿泊しましたので、宿主はもちろん、世話役にあたった人は懸命に接待をしたのです。しかし、今のように、標準的な言葉が使われる時代ではありませんし、薩摩、長州、因幡の言葉、それに、京言葉もあったはずですから、出雲弁との違いは歴然としています。真意が通じず、戸惑ううえに、理不尽なことをいわれて怒鳴られ、いまにも、刀をぬきそうになる様子もみせつけられ、恐ろしさに、押し入れに身をかくしてしまう人もいたそうです。

ともかく、早くこのときが過ぎてくれるのを待ちながら、世話をする人たちは疲れはててしまったそうです。一行が宍道をたって、松江に帰る日、沿道に平伏して見送ったのですが、親と一緒にすわった子供たちは、行列をみようとしても、あたまを大人に押しえ付けられ、地面ばかり見ていたそうです。まるで通り魔のようだったと語り伝えられています。

このとき、総督の西園寺公望は17才でした。こののち、フランスに留学、帰国後は明治政府の要職を勤め、昭和の代には最後の元老とし

て、天皇の最高顧問の地位にありました。政党政治をめざし、軍部の政治への介入を防ごうと努力をしたもののならぬまま、太平洋戦争勃発まえに亡くなりました。

* 田山 花袋 (たやま かたい)

明治4年(1872) ~ 昭和5(1930)

明治、大正期の自然主義文学者の中心的人物の花袋は、『布団』『田



田山 花袋

舎教師』などの作品で知られています。栃木県の出身で、貧しいなかで成人し、一家をあげて上京したのをきっかけに、文学的才能を開花させ、文壇に登場しました。

はじめ、青春期の感傷を美しい自然のなかに描くのを特徴としますが、のち、『布団』に代表される私的内面を、赤裸々に描く手法によって、その後につづく私小説の基をつくった作家でした。

『布団』は内弟子であった年下の若い女性に、はげしく恋する中年男性の、性的関心やエゴイズム、感傷を暴露した小説で、とくに、主人公の中年男性が、去っていった女性の布団の匂いを嗅ぐところの描写は文壇に衝撃をあたえた作品でした。

この小説は、花袋の実像で、明治39年（1906）9月には、自分のもとを去った女性を追って旅に出ます。女性の故郷が広島県の上下町だったため、そこを訪ねたのです。花袋の脳裏には若く美しい彼女のすがたが狂おしいまでにやきついた苦しい旅でした。

花袋は傷心のころを抱いたまま、足を出雲に向けました。三好から人力車で出雲に来て、大社に詣で、今市から直江をへて、庄原に出、松江に行くため汽船に乗り込みました。

この汽船のなかで、花袋は生涯わすれえぬ美しい情景と、美しい女性に出会ったのです。それは、宍道の町をのぞむあたりでのことでした。このことは、『花袋紀行集』第3輯「宍道湖」に書かれています。

ちょうど4時頃、夕日が美しく湖の半面を照らし、その堀割の兩岸には櫛が並木のように植えられ、美しく紅葉していました。夕日はまさに沈もうとしているところです。花袋は帝王の覇業も、栄華もこの一瞬の中に尽きてしまうような、大きな感動を覚えていたその時、甲板にいた女学生と、女教師に目をとめます。夕日のなかで振り返った二十七、八才とみえる女教師は、「それは美しい女であった。何方かと言えば、顔の蒼白いもう深く浮世の恋に浸ったといふような女」でした。

その女学生と女教師は、花袋のまえで、静かに、静かに唱歌を歌い出しました。

花袋はなんともいわれない心持ちで、その唱歌に聞きいります。心には、恋慕う、去っていった女性の面影があふれ、花袋の気持ちをはげしく揺すったのです。

「宍道、宍道上がりの方はございませんか」汽船のボーイの声がしました。

汽船は夕日に照らされた白亜の水郷の方へ近寄って行きました。それは、白亜の人家の連なった後に、低い丘陵のたなびいている絵のような風景だったのです。

女学生と美しい女教師は、その水郷に栈橋がなかったので、ゆらゆらと近寄ってくるはしけに乗り込み、また、ゆらゆらと動くはしけとともに、花袋のまえから遠ざかっていったのです。

その後、花袋はいろいろな人にこう語りました。「夕日といふ感じの一番美しかったのは、宍道湖の宍道といふ處ですね。あそこには、白亜の家が水に臨んで連なっているので、それは夕日にさしそふさまが何とも言われぬ。インプレッションニズムの絵と言って好いか、何と言って好いかわからない。宍道湖の八景を選ぶとしたら、第一に宍道の夕照と言ふのが浮かんで来るような気がするところですよ。」

宍道の町に下り立たなかった花袋でしたが、絵のような白亜の水郷宍道と、湖面に沈む夕日、そして、宍道に降りた、浮世の恋に浸ったような美しい女性の面影は、終生わすれえぬ思い出になったのです。

* 河東 碧梧桐 (かわひがし へきごとう)

明治6年(1873) ~ 昭和12年(1937)

明治43年(1910)1月20日、雪がまだ宍道の町に残っていて、歩くとその冷たさが骨に徹するほどの日でした。午前中は晴れ、午後にな



河東 碧梧桐

って曇り空になった日のことです。

当時、日本の俳句界を高浜虚子と二分する俳壇の大御所、河東碧梧桐が、出雲の弟子、竹内映紫楼と宍道駅に下り立ちました。

碧梧桐は、伊予国松山に生まれ、同郷で俳句、和歌の世界に新風を巻き起こし、若くして逝った正岡子規に俳句の手ほどきを受けた人物です。京都の三高、仙台の二高と学ぶかわら、子規の俳句革新運動に加わり、俳句の道

に進みました。

同じく、同郷で、松山中学時代同級生だった高浜虚子も子規に師事し、二人で子規没後の日本の俳句界をリードしたのですが、次第に二人の目指す方向は異なり、明治36年ころには虚子の伝統的空想趣味に対して、碧梧桐は現実的実写主義にむかって、二人の句風は大きく相違してきたのです。

碧梧桐は明治39年から、新気運の自分の句風を広めるため、全国行脚の旅にでかけました。

この全国遍歴の旅で、山陰道へ来たのは、明治42年4月に始まった第二次行脚の時でした。山梨県から長野、新潟、富山、石川、岐阜、三重、愛知、福井、兵庫、鳥取、そして島根に入りました。能義郡赤

江村で43年の元旦を迎えています。

各地で、地元の俳人たちの歓迎をうけての旅でした。

出雲では三刀屋の竹内映紫楼がつき従っていました。宍道駅に着いたのも、映紫楼の地元、三刀屋へ行く途中のことです。

前夜は玉造温泉に泊まり、冬の長旅のつかれを癒やし、あくる日の20日、玉造から汽車で宍道に来て、そこからは、歩いて木次を通り三刀屋へ向かったのです。

碧梧桐の行脚の旅日記『続三千里』には、おとずれた土地、その地の俳人たちのことや、状況がくまなく書かれています。

しかし、宍道には碧梧桐の新風に傾倒する俳人がいなかったのでしょうか、『続三千里』には宍道のようなすが、書かれていません。わずかに、駅に映紫楼と下り立ち、草鞋をはきかえて、雪のみちを歩き出し、骨身にしみる冷たさに、昨夜の温泉の暖かさが懐かしく「今の境遇の変化を思った」と書いています。これは、俳壇における自分の革新さに対する抵抗のきびしさを、暗に思ったからでしょうか。

しかし、「映なくんばこの変化も亦たあるべからずである」とも書いていますから、映紫楼がいなかったら、三刀屋という地に行かなかったのに、という雪道の冷たさゆえの、愚痴のつぶやき、だけだったのかも知れません。

ともかく、雪道を四里あまり歩いて、木次の里熊橋に着き、木次の同人の歓迎を受けたのです。

この全国行脚の旅の最中から、俳句の自然主義、近代化をうながす、

新傾向俳句運動は盛り上がりを見せたのですが、碧梧桐の俳句が、新傾向から、自由律へ、さらに、ルビ句へと変化していくにつれ、運動内部からつぎつぎ非難の声も上がり、大正期に入ると振るわなくなってしまうました。

＊ ^{どくらくか}独楽窩を訪れた人々

木幡氏の別荘は、今、木幡山荘と呼ばれていますが、別に、独楽窩とも言っています。この山荘は、木幡家4代目の喜三郎が、隠居所として、妻とともに住んだところでした。

喜三郎は、浄意、妻は妙蓮と号しています。二人とも長寿を保ったため、延享3年(1746)の2月、藩主宗衍がこの山荘を訪れ、親しく夫妻に对面をしました。この時、浄意が九十七才、妻妙蓮は九十才でした。ともに食事をし、夫妻に白金十両、息子与右衛門に黄金二百匹、宗衍自書を二紙賜っています。

この他、藩主たちが木幡家をおとずれています。それらは、木幡家の記録に残されてされていますから、その詳細はいずれ発表されることと思います。

明治13年(1880)、12代久右衛門梅屋が『独楽窩集』として、山荘を訪れた文人墨客の歌詞を年次をおって編集しています。

享保11年(1726)の夏、松江の歌人明珠庵釣月は浄意をたずねて「歌よみ物せよ」と請われて「世々すめるこのやま水を友としてひとりたのしむ心深しも」と詠んでいます。

松江藩の儒臣、桃白鹿は「葉山翁伝」として、喜三郎浄意が独楽窩に住したいきさつと、宗衍公の来訪のことなどを記しています。宝暦7年（1757）秋の記述です。

以下、その名を列記してみます。

元朝。翁堂閑斎。子琴。蛻庵。南禅寺住職大観長老・檐雪叟。備後



貫名海屋筆 水墨山水

の人・木村渫庵。伏見の人・羽倉可亭。浪華の人・中川壺山。京都の人・貫名海屋。京都の人・中島櫻隱。豊後の人・広瀬旭莊。伯耆の人・児玉玉立。保實。豊後の人・劉石安芸。備後済法寺住職・物外不遷。広瀬藩士・樋野含斎。大社の歌人・島重老。長門藩士・近藤芳樹。津和野の人・野々口隆正。松江藩儒臣・雨森精翁。田能村直入。

そのほか、木幡家の記録の中には中国、清末の画家胡鐵梅もいます。胡鐵梅は山水、人物を描いて巧みな人で、明治11年くらい、しばしば来日し、神戸、名古屋に住み、山陰各地を歴遊しています。

(参考文献)

『内山真龍道之記 出雲行』 内山真龍著 (島根県立図書館蔵) 写本

『内山真龍著出雲行日記註疎稿本』 山下春樹著刊 昭和11年

『日本九峰修行日記』 野田成亮著 三一書房 昭和45年 (日本庶民生活資料集成 2巻)

『泉光院江戸旅日記ー山伏が見た江戸期庶民のくらし』 石川英輔著 講談社 平成6年

『しほゆあみ之記』 頼杏坪著 (島根県立図書館蔵) 書き下し文複写本

『花袋紀行集』第3輯 田山花袋著 博文館 大正11年

『続三千里』上巻 河東碧梧桐著 文淵堂 大正3年

『独楽窩集』 木幡梅屋編刊 明治13年

『歴史の中の旅人たち』 藤澤秀晴著 山陰中央新報社 昭和56年 (ふるさと文庫10)

『聞き書ふるさと西来待』 西来待歴史文化伝承の会編刊 平成6年

『宍道町史』 町史編纂委員会編 宍道町 昭和38年

『山陰文学の旅』小原幹雄著 松江今井書店 昭和40年(山陰文化シリーズ10)

『島根文学地図』伊沢元美著 松江今井書店 昭和43年(山陰文化シリーズ30)

『国史大辞典』 吉川弘文館

『日本人名大事典』 平凡社

『東洋大百科事典』 臨川書店

『日本近代文学大事典』 講談社

『静岡大百科事典』 静岡出版社



第二章

* 田能村直入 (たのむら ちよくにゅう)

文化11年 (1814) ~ 明治40年 (1907)



枯木竹石図

文人画家。出雲地方で人気のある南宗画の田能村直入は、1814 (文化11) 年に豊後国直入郡竹田町 (現在の大分県竹田市) の庄屋の子として生まれています。文政5年、9才の時、同郷の文人画家田能村竹田 (1777-1835) の

私塾竹田荘に入塾しました。のち田能村姓を継ぐことになりますが、ここで竹田に画のほか唐詩選の講義を受け、国学を角田九華に学んだりしています。

こののち竹田にしたがって大阪におもむき、大塩平八郎の洗心堂に

入塾、陽明学と武術を修めたり、篠崎小竹に経史を、豊後国で塾を開いていた廣瀬旭荘に詩学を学んだりしています。そのほか書法や禅学も学んでいます。このように絵画だけでなく、いろいろの学問に通じた学者、文人が描いた絵画を文人画といっています。直入というのは、生地の直入郡からとったものですが、別に忘斎、幽谷斎、布袋庵、竹翁居士などの号があります。

明治11年画学校の設立を京都府に建議しています。田能村直入が出雲に来たのは明治12年です。京都に画学校を設立するための資金集めが目的で、田部家、桜井家、木幡家などに逗留し、書画を描いています。直入は諸国を歩くのが好きで、28か国（地方）を訪れたといわれていますが、ふるくから文人墨客といわれた人々は各地を訪れ、地方の名望家のもとに長期に滞在し、画や書を描いたりしたものです。

直入は煎茶も好んだようで、「鬼の念仏」には「出雲地方でも、明治の初期は文人趣味からの煎茶道が流行し、明治12年に出雲に遊歴し数々の名作を遺した南宗画の大家、田能村直入も有名な煎茶家であったので、私の家に逗留した時も家族に煎茶の法を大いに鼓吹実演し、仁多郡仁多町の桜井家には庭前の飛瀑の下に自ら設計した二畳の煎茶室が今に残っている。信長、秀吉以来の武家は抹茶を嗜み、学者や文人墨客は煎茶を好んだ。煎茶には詩歌管弦が出来る者でなくては資格なしとされ、古くは石川丈山、降って田能村竹田、頼山陽等はその代表的存在で」と書いてあるように、直入の煎茶好みは師竹田譲りのものようです。

そのほか「鬼の念仏」には、「竹田の養子で別派を立てた直入も、出雲で特に人気があるのは、出雲人が特にその作を理解したというより、むしろ彼らが地方の名家に滞在している画描きさんだから偉い人だろうと考えたものであろう。」という一節もあります。

木幡家には、画「富貴長年」と画卷「木幡山荘・独楽窩図」や小虎の号で描いている「小児遊戯図」、直入、頼支峰等が描いた「諸家詩画集」が残されています。

＊ 東郷平八郎（とうごう へいはちろう）

弘化4年（1847） ～ 昭和9年（1934）

明治・大正・昭和の軍人で、海軍大将、元師を勤めた東郷平八郎は、日露戦争では連合艦隊を率いて旅順港を攻撃し、明治38年5月の日本海海戦では、ロシアのバルチック艦隊を迎え撃ってこれを壊滅させています。「皇国の興廃此の一戦に在り各員一層奮励努力せよ」の言葉で有名です。



東郷平八郎

東郷大将が宍道町を訪れたのはこの2年後、明治40年5月26日のことで、皇太子・嘉仁親王（のちの大正天皇）の山陰行啓の随員としてでした。当時米子以西の島根県内はまだ鉄道が通じていませんでした。殿下が島根県入りされたのは、5月21日で、安来で1泊、松江で22日から25日まで4泊、出雲で2泊等県内の行程は

計14泊で、ざっと半月かけてゆっくと馬車で巡回されています。

5月26日付けの山陰新聞には、殿下が宍道湖を遊覧された際、「特に東郷大將を御座船に召されしが殿下には大將を仮りに湖上水師提督としての御思召ありやに漏れ承はる。東郷大將は湖上の指揮は梢々困難なりと苦笑せられたる由なるが好話柄と云うべし」の記事と、「殿下松江御出立」として「殿下には御予定の通り本日午前九時松江御旅館御出門奉迎の際と同様に保田警視御先導を申上げ八束郡玉湯村大字林なる御野立所にて御少憩再び御発車正午宍道町木幡久右衛門氏方に御晝餐午後貳時御発車斐川郡直江町高等小学校に暫時御少憩の後同四時三十分今市町御旅館へ成らせらるる筈にて」の記事が見えます。

翌27日付け山陰新聞には「宍道より」と題して、「▲殿下には奉迎者堵の如き群集中を御機嫌麗はしく御予定の通り正午木幡邸へ着御遊されたり ▲宍道駅入口には役場銀行員および豪農商各紳士赤十字社員帶勲者数千人御道筋の両側に起立して奉迎せり ▲町内の装飾は紅白五段の幕を町内両側に通じて張り廻し且つ毎戸軒燈を吊日章はいふせき賤か伏せ家に至るまで東風になびかせて敬意を表し居れり その他余興の飾物は見受けさりしも町の両端に大國旗を交叉して大に賑況を添えたり ▲木幡御晝餐所へは東郷大將手植ありしが松樹の高さ三尺 ▲殿下の着御の模様を記し奉らん第一の大門を入らせられ第二の小門より玉歩を進まされて御座所に成らせらる 御座所は例により金糸銀線を以て彩れる錦繡のテーブル掛に御身をよせられ御晝餐あらせられたるやに洩れ承る 尚 殿下には同所庭園にて宍道湖の生洲

に養へる鯰、鱧、雑魚を御覧に供したるに次の御旅館迄御持帰りの栄を得たり ▲大門の装飾は紫縮緬の大幕を張り大国旗を交叉し巖然の状や犯すべからず 殿下の御上覧に供し奉りし同邸の蔵品は柳里恭の三幅對、竹田畫帖、仙嶺の鶴、支那畫の四点なり ▲供奉高等官の御晝餐所は殿下より四間を隔てて 瀟洒たる閑室なりき ▲木幡氏方にては記念のため御発車後において御座所を撮影せり尚ほ衆人に拝観を許す筈にて門外は只今（午后三時）数千人四方より詰め掛町内は上を下への大雑踏を極めたり御晝餐所の構造及び模様は次号に譲る」の記事があって、皇太子殿下が木幡邸でご昼食をおとりになった様子と宍道町民の歓迎の様子がわかって興味深いものがあります。90年後の今日、高さ3尺だった東郷元帥の手植の松は八雲本陣の庭で大木となってそびえています。

5月28日付け山陰新聞には「鶴駕随従記（二）（二十六日）宍道御少憩所の構造 ▲御少憩所は前便既報の如く木幡久右衛門氏邸に設けられしが 先づ宏壮なる正門の高さ壱間半扉は木理正しき杉の壱枚板をもって造られ其扉幅は壱間ありてサスがに苦心に成れるを称すべし

正門を入り歩を右に進めてまた左折すれば是に第二の小門ありて直ちに御座所に入るの順序なるが境内庭園の配合は宛然大規模の雅趣を縮少せるの観あり 数株の老松三五の奇石その間を点綴して美景を作す又た御座所の造営に到りては多年の丹精数奇を凝らせる木幡氏の苦心も顕はれて歴然たり

此の御少憩所は先年かしこくも聖上 陛下が山陰の僻地を御厭はせら

れず行幸の思召あらせられし際建築に従事せりと聞きしが、時あたかも日露の大戦起り行幸も御見合せとなりしよりやむ事を得ず一時工事を中止したるも今回の盛事に方り昨年以來日夜工事を督しここに東宮殿下の御少憩所に充てらるるに至り次第なり 御座所左側には六枚金屏風をズラリ整列し床には扇面の金巻絵なる冠棚を設け且二幅の掛物を懸けられ紅白を彩れる松と牡丹と何れ栄ある趣を添えて大花瓶に插まれぬその隣室を東宮武官室とす 此室も亦盛飾を施されて奥床しかりき

御少憩所の用材は隅々まで精選せるものにて 椽板は榿を用い其厚さ一寸五分天井は格天に研き上げられ、欄間は木象かんにて斯界の名匠青山泰石氏の彫技にして燦然たり 更らに 椽先には老間四方の生洲を開さくし宍道湖生育の魚類を飼養して殿下の上覧に供し奉れり」

引用が長くなりましたが、当時の情景と宍道の関係者全員が緊張して行啓に対応したことがよくわかります。

文中にてでてくる欄間の作者青山泰石は、松江出身で明治大正時代に木象眼の名工として知られた人です。一枚の地板の表裏画面が異なっていて、表は「蘭陵王舞楽図」、裏は「波に千鳥図」が彫られています。

このほか 「沿道の光景」として「宍道村の飾物既記の外宍道小川橋の欄干には杉葉もて蔽へる数十の球籠を吊り下げたり」という記事が載っています。

これらの記事によると、皇太子殿下を迎えた当時の宍道は、町の両

端に大国旗を交差して飾り、紅白五段の幕を町内両側に張り巡らし、各戸に日章旗と軒灯を飾っています。

現在の4区と5区の境となっている小川橋の欄干には杉の葉で飾った数十個のでんとうをイルミネーションのように吊り下げて飾りとしたことがわかります。

行啓で人気のあったのは、なんといっても日本海海戦の英雄・東郷大将で、大将は木幡邸では松の記念植樹と「景雲飛」の揮ごうをしています。このほか松江では、5月24日に師範学校附属小学校、25日には宍道湖遊覧の帰途、城山記念碑前に松を手植え、27日には大社境内に楠を、千家邸内と大社教院内に松を手植えするなど皇太子とほぼ同数の手植えの松を残しています。

5月29日付け山陰新聞には「途上雑感記（二）（二廿七日夜今市旅館に於て）海軍記念日 東郷大将感慨」と題して「本日千家邸御少憩所にて東郷大将、古賀警保局長、松永知事」が休憩の際、東郷大将が知事に向かって「此地方は慥に日本海海戦の際 殷々轟々天地も劈くる斗りの砲声伝はりしならんと問はれけるに知事は此地は素より遠く松江に至る迄其砲響を耳にせる旨を答えたるが更に東郷大将は語を継がれ謂へらく「一昨年の今月今日しかも今時（時計二時を指せる折しも）は日本海に於て美ん事露鑑を窮地に陥れ既に二隻の軍艦を撃沈せるより志気益々揮ひしを以って窃かに勝利の我にきせしを確保するを得たり」と日本海海戦の思い出を語ったことが記事となっています。

* 小汀利得（おばま としえ）

明治22年（1889） ～ 昭和47年（1972）

経済畑のジャーナリスト、評論家として著名な小汀利得は、1889年（明治22）島根県出雲市に生まれています。

昭和32年7月以来東京放送テレビ（TBS）の対談番組「時事放談」に、細川隆元とコンビで出演し、長寿番組となっていますが、その間ビートルズを「乞食野郎」、早大内ゲバ事件を「けだもの集団」と評して毒舌タレントの定評を得ています。

「鬼の念仏」では、毒舌に就いてと題して小汀氏の考えを『翁は生前から葬式改良主義者で・・・今の告別式は会葬する人にとっては一つのビジネスに過ぎぬ。死亡広告に「ついでながら御供物の儀は一切おことわり云々」と出ているので、そのつもりで行くと、香典を受け取る係が堂々と店をひろげて待ち受けているところが多い。花輪などを持ち込むことはやめて、役に立つ現金を贈った方がよい。私のうちで誰か死んだら「香典歓迎花輪はお断り」と新聞広告してやろうと思っている。また貰った香典を何処そこへ寄付したという挨拶状には大抵の人が釈然たらざるものがあるようだ。遺族の生活費の足しにするからとした方が、呉れた人の芳志にむくいる所以だ。』と述べています。『翁は人から毒舌家といわれることは好まなかったらしく「僕は人から毒舌家といわれて、独りで嘔き出した。これまで毒舌ということの研究してみたこともないし、その定義も正確には知らないでこの年まで生きて来たが、うすぼんやりと気がついたことは、嘘をいわな

いことを毒舌とよぶものらしいということだ』と引用しています。

「鬼の念仏」に中海干拓秘話の題で中海埋め立て問題について、『田部知事時代に島根県総合開発審議会ができて、県出身の中央の知名士として小汀利得氏も委員であったが、会議の席上知事から意見を問われた小汀氏は「宍道湖、中海は世界にも少ない貴重な観光資源だから埋立てなどはもっての外だ。県は観光一本槍で行くべきだから総合開発を観光開発と改めるがよいという爆弾動議に、聴く者みな驚いてあっけにとられた。・・・その翌日、私は小汀氏と私の八雲本陣で会食したが・・・』と載っている。

読書家としても著名であり、小汀の財産は「万卷の書」ではないかと評される程の蔵書家でもありました。この間の事情を「鬼の念仏」では、学問を生かす道の題で「近いところでは、出雲市出身の元日本経済新聞社長で評論家の小汀利得翁の読書も有名で、同氏邸を訪問した者は広い家の廊下の隅々まで山と積まれた蔵書に度肝を抜かれた。明治、大正の中央新聞社長には黒岩涙香、徳富蘇峯のような文人か学者が多く、自ら社説を書いたが、現代新聞の社長には算盤片手の産業人が多くなった。小汀翁は前者の最後の人であった。」と述べています。

また色紙攻めの題で「大小の名士が宿屋に泊まると宿帳のほかに、芳名録や色紙をつきつけられるそうだ。・・・面倒くさがることを知っているの、私は新聞社にも自宅の八雲本陣にも芳名録をつくらず、色紙の用意もさせぬことにしている。・・・明治元年山陰道鎮撫使と

して来泊した西園寺公望（のちの元老）も、わずか一夜の泊まりに中国の孝経の一節を半切二行に書き残している。・・・これは宿主がお願いしたものとは思われぬが、さりとして進んで書いたものであろうか。」とあります。さすがに、小汀利得の色紙等は残されていません。

* 棟方志功（むなかた しこう）

明治36年（1903） ～ 昭和50年（1975）

1903年（明治36）9月5日、青森市に生まれた版画家です。ゴッホにひかれ画家を志したといわれています。昭和3年には松江市出身で、当時東京に住んでいた版画家平塚運一を訪ね、版画の技術を見せてもらったりしています。

昭和13年頃松江にはじめて来遊し、八雲村で紙漉きをしていた安部榮四郎と版画と紙の関係で交遊がはじまっていきました。

戦前から10回近くも島根県で個展を開いていますが、昭和37年5月松江市庁舎市民室に木彫壁画「鼓笛の柵」を完成し、6月1日－3日、松江市公会堂で「壁画完成記念棟方志功展」が開催されています。

八雲本陣にある虚無僧姿の「木幡吹月先生の像」の画は、昭和28年6月23－27日、松江京店織原ギャラリーで「棟方志功作品展」（島根民芸協会主催）が開催され、板画「流離抄」等20点、倭絵6点、陶画が出品されていますが、この会期中八雲本陣で描かれたものです。

棟方は、昭和36年12月14日付中国新聞紙上で「平塚先生には三十歳ごろから親しく版画の話しにかよったものです。私は最初油絵をやっ



木幡吹月先生像

ていたのですが、版画に目を向けるようになったのは、平塚先生のおかげです。河井先生は私の心の先生とでもいいでしょうか。安部さんの紙は私の作品にとって欠かせないものです。私の作品には安部さんの紙がぴったり合うんです。」と出雲との深い関係をのべています。

昭和63年10月、「特別展 島根を愛した巨匠 棟方志功展」が県立博物館で開催されましたが、この展覧会の図録中に、当時島根新聞社長だった木幡氏との対談が載っていて、「時にこ

の前に、あなたは私の持っている大雅の富士のびょうぶを二度まで見に来ていただいたが、大雅はお好きですか。鉄斎とはどちらがよいですか。その他好きな日本の画家は一。」との質問に、棟方志功氏は「大雅ですね」と答えています。

ちなみに昭和43年日本人として初めてノーベル賞文学賞を授賞した川端康成氏も昭和41年6月18日に、夫人、令嬢同伴で来宍して、八雲本陣に一泊していますが、その訪問の目的も木幡家所蔵の池大雅の「富

士」のびょうぶを見ることでした。

「鬼の念仏」に「大観画伯と松江」の題で、「宝暦年間に出雲地方に来遊し、出東村（現在の簸川郡斐川町）の勝部家から庄原村（同）の永徳寺に滞留した池大雅の画も所望手がなく、長櫃一杯の作品がみなネズミの巣になったという残念話もあるから」との一節があります。

* 松本清張（まつもと せいちょう）

明治42年（1909）～平成4年（1992）

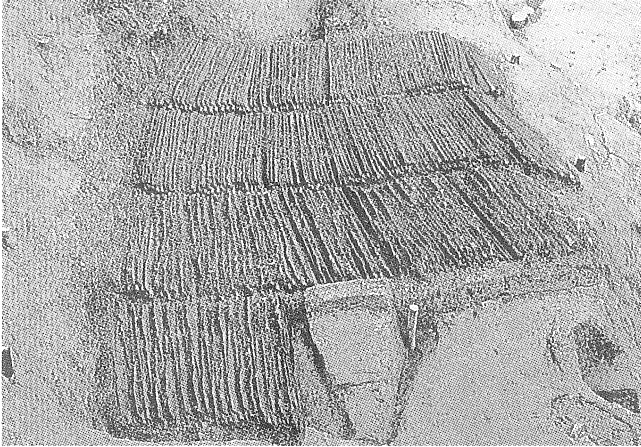
小説家として著名な松本清張は、1909年（明治42）12月21日に福岡県小倉市で生まれています。本名は清張（きよはる）です。

初期の短編小説は、社会的に下積みの者への深い共感を示した歴史物が多かったのですが、昭和30年「張込み」を発表したのをきっかけに推理小説の分野に進出し、長編「点と線」がベストセラーとなり、社会派推理の誕生となりました。

また、古代史や考古学にも造詣が深く、昭和59年7月、隣町の簸川郡斐川町神庭の荒神谷遺跡から358本の銅剣が出土した際、山陰中央新報社が主催した公開シンポジウム「古代出雲王権は存在したか—弥生銅剣大量出土の謎に迫る」の司会を勤めています。

10月29日、シンポジウム会場の島根県民会館大ホールは、県内外から参加した1300人を超える古代史ファンと報道陣で埋まりました。

翌60年7月には、さらに銅鐸6個と銅矛16本が発掘されました。61年3月22—23日に山陰中央新報社の主催で島根県民会館で行われた公



銅剣358本の発見（1984年）

開シンポジウム「出雲・荒神谷は何を語るか—銅剣・銅鐸・銅矛、一括埋蔵の謎」の司会も前回に続いて引き受けています。松本清

張編の荒神谷遺跡関係著作としては、昭和60年「古代出雲王権は存在したか」（山陰中央新報社）、61年「銅剣・銅鐸・銅矛と出雲王国の時代」（日本放送出版協会）、62年「古代出雲・荒神谷の謎に挑む」（角川書店）があります。

八雲本陣にはこれ以前から前後4－5回訪れているようで、松本のミステリー「数の風景」（朝日新聞社 昭和52）には、平田の一畑寺や、御津、十六島、石見銀山、浜田、出雲などが登場していますし、「Dの複合」（光文社、昭和43）は鳥取県の三朝町が事件のカギを握る舞台として設定されています。

八雲本陣には「原稿」「手紙」「色紙」「署名入り著書」があります。

第7回日展松江会場と橋本明治、小糸源太郎、徳岡神泉、澤田政廣

昭和40年5月29日日展松江会場が第1会場県立博物館（洋画・彫塑）、第2会場松江市公会堂（日本画・書）、第3会場一畑百貨店催し場（工芸）の各会場で開幕しました。5月30日付け島根新聞には「第7回日展松江会場花やかに幕ひらく 入場者好調のであし 三会場三七十点を展示」の見出しのもと一面に報じています。

島根新聞社の主催で山陰地方で初めて開催された日展は、29日あいにくの雨のなかを4千人が入場し幕を開けています。「午前9時、県立博物館の前庭で芸術院会員、日本画の徳岡神泉氏、同洋画の小糸源太郎氏、同彫塑の澤田政廣氏、同工芸美術の山崎覚太郎氏、書の田中塊堂氏の中央委員、日展評議員、洋画の田村一男氏、同島野重之氏、浜田市出身で日本画壇の寵児、橋本明治氏... など約六十人が参列して開場式が行われた」



橋本明治・出雲大社奉納壁画「龍」

島根新聞社主催の日展松江会場開催に尽力支援した橋本明治は、1904年（明治37年）島根県那賀郡浜田町大字浅井（現在の浜田市田町）の生まれで、当時日展

の評議員でした。

島根新聞社の社長であった木幡吹月氏が、日展会期中の一日、橋本氏はじめ4氏を八雲本陣に案内しています。

「鬼の念仏」には「小糸画伯夫妻をはじめ、同じく役員として來県中の徳岡神泉、沢田政廣、前記橋本明治夫妻を私の八雲本陣にご案内したところ、郷土色の残る席庭や料理が好評を博し」「当日の宍道湖産の川魚料理が気に入って座興揚がるころをみて、随行兼案内役の美術商藤井紫泉堂主人は、諸先生ご機嫌よろしきゆえ色紙の席画をお願いしたらと耳打ちしてくれたが、八雲本陣はどんなお客にも芳名録と色紙は出さぬことにしているので、色紙の手持ちもないまま、画仙紙を四つ切りにして、古硯、古墨を取り出すいとまもなく、有り合わせの筆墨を並べたところ、口切り役の橋本画伯は「若松」、木彫の沢田先生は余技として定評ある仏画の「太子像」、寡作で有名な神泉画伯も快く「いが栗」の一図を物されたので、小糸画伯もやおら御輿をあてげ、用意のスケッチ箱を開き、油絵具のパレットを老婦人に託しながら、薄いおしたじ絵具で生画仙紙に当日の会席の二の膳に出した本陣家伝料理の「法飯」の絵を見事に写されたが、朱椀に盛られた白飯の上ののせた具物は何と何でしたかねと問われるままに、「賽さいの目豆腐」「青ねぎ」「板のり」と私が言うと、青や黒の絵具が加えられて絵は出来上がった。かねて俳人としても自他許す先生は、その余白に「法飯に雨のつまさき上がりかな」の一句を添えながら、読み返して「これは「季無し句」になった」と苦笑しながら筆を洗われた。… 後日、

出来上がった軸箱には果たせるかな「梅雨晴」と題簽^{せん}されて来た。」とその様子が描かれています。

5月30日付けの島根新聞には、「熱心にメモする学生 日展松江会場郷土作家もご同伴で」の見出しで、「徳岡神泉氏夫妻、橋本明治氏夫妻などの中央委員、郷土の関係作家もご同伴が多かった。その中で小糸源太郎夫妻と…」と載っています。

橋本明治、徳岡神泉は日本画家、澤田政廣は彫刻家、小糸源太郎は洋画家でいずれもこの後文化勲章を授賞しています。

(参考文献)

- 『近代日本美術事典』 講談社 1989年
- 『鬼の念仏』 山陰中央新報社 1975年
- 『続鬼の念仏』 山陰中央新報社 1977年
- 『続々鬼の念仏』 山陰中央新報社 1983年
- 『現代人物事典』 朝日新聞社 1977年
- 『日本音楽大事典』 平凡社 1989年
- 『特別展島根を愛した巨匠 棟方志功展図録』 島根県立博物館 1988年
- 『日本近代文学大事典』 講談社 1977年
- 『新山陰小説風土記』 山陰中央新報社 1995年
- 『新聞に見る山陰の世相百年』 山陰中央新報社 1983年

第三章

にっかん きじ びぼう 日間瑣事備忘 (抄)

広瀬旭莊

嘉永七年十月

五日

(前略)

○大坪大輔の父行蔵の東に、元恪曰く、旭莊先生何日に我郷に臨むを識らずやと。敢て問う、天臣と議して曰く。此地の人虜船の至るを聞き、まさに卒保を發せんとす。隠岐は恐らく詩酒なく 風流の意、宍道・今市・杵築地方に遊ぶにしかざるなりと。乃ち恬師及び精齋忠兵衛に告ぐ。皆曰う。土人いまだ先生の至るを知らず。請い留めんと。天臣曰く、湖西の人渴望すること甚し。且、一往復の来、皆善しと曰う。

(後略)

六日

明日をもってまさに宍道に赴かんとす。天臣、通玄をして往いて大坪行蔵に報ぜしむ。

(後略)

(用語解説)

東＝手紙

卒保＝軍隊

土人＝土地の人。

一往復でいいから来てもらいたい。

七日

(前略)

○朝来、晴暖、皆、舟行可なりという。乃ち嘉蔵に属して舟を買う。恬師金百疋及び紙を驢る。昨日の骨董師肥後屋利七なるものまみえんことを請う。秋香をして接せしむれば、字を乞い、今日来りてこれを取らんと。秋香其潤筆金の初めと約違するをもって、これを却く。余聞きてこれを止めていわく、彼海屋の例を引待するなりと。吾子いわく、師、豈、海屋の例もて視る者にして可ならんやと。吾謂く、海屋のごときは、必ず鎚銚を争うも我は則ち是を争わず、その例として視る可からざる行以なり。吾子、須らず我意を體すべし。乃ちこれを受け、別に書一紙を賜ふ。○恬師いわく、大社、松本暢玄なる者あり、頗る文字を解す、吾、まさに先生に薦めんとす。裁束余に授く。○朝来、字を乞う者絡繹申牌に至りて始めて訖る。舟子来りて告ぐ、舟既に遅く祠後に燈籠を高くして下る。乃ち三子を携さえて舟に入る。恬師送りて岸に至る。舟大なること赤関の飛船の如し、始め岸を離れ、東風徐ろに起りて湖、波ならずして舟疾く、水色甚だ潔くして、稍深く底見えず、四望すれば松江城下長街湖に瀕して蜿蜒五六十丁、城は西北に在りて岡頂粉樓、巍然として樹巔に聳え、其下一簇の紅葉錦の如

朝来=朝から
属して=頼んで
驢=はなむけ

潤筆金=揮毫料
海屋の例=貫名海屋の前例を引いてこのようにする。
豈海屋の例=我が師旭莊は海屋の前例でいいのか、海屋より上である。
鎚銚=揮毫料を争う。
絡繹=ひっきりなし。
申牌=午後四時
赤関=地名か

湖に瀕し=湖に面して
粉樓=白い樓城
樹巔=樹木の上

く、街^{まち}盡る處、南北皆青林にして、湖其間に通じ、廣きこと三十丁ばかり、林^{りん}後^ごの地形^{ややかいかつ}稍開豁、連山屏の如く、皆低小にして遠きものは漸^{ようや}く高く、北岸^{どひ}土皮有り、崩落して岩色^{こつぜん}兀然、出れ者^{ば おおよそ} 九十六所、土人赤壁と呼びて萬^{ばん}鳧^ぶ浮沈^{たちま}す。忽ち飛びて舟を避けること数十歩ならず。復^{また}、下日^{かじつ}西雲に没す。明晴北雲陰湿、湖面或は紫に、或は黒に、山色たちまち緑、たちまち黄、氤^{いん}氳^{うん}萬状、嘗^{かつ}て、琵琶湖を過ぎたるも大いに此勝^しに若^{かれ}かず。彼、山は高く、水は濶^{ひろ}く、此^これ、山は卑^{ひく}く、水は狭^{せま}く、景^{けい}異^いる。遠近の観^{しやう}分詳^{ほぼことさらちか}すれば略^び故^{すいおぼ}爾^し。微睡^{たそがれ}覚ゆるころ宍道に近し。黄昏後岸を傳ふ。宍道の人家四百餘。大坪氏中間に在り、元恪、通玄をして先に住^ゆかしむ。行藏、燈を提げて来り迎ふ。いわく、向^{さきなるものす}者^で既に人をして路^{みち}に候^{また}しむ。其家に入り舟子に錢七百二十文賜ふ。坐^つに就^やいて良久^{しう}して迎者返る。主人家は新築^{かか}に係^{しやうへき}わり、墻壁^か清浄にして羞^{しゆうぜん}膳^{ぜん}豊潔^{よるこ}皆悦^{むか}ぶ。○松江より宍道に至る四里直西に向ふ。○行藏妻^{まみ}に見ゆ。

八日

室氏及び徹雲一郎に裁答^{かん}し、東^{かん}また裁して晚翠に寄す、金城小虎東してこれを封す、是^{さき}より先、裁して南陔兄に寄せ、谷口宗助に束す午後、元恪をして松江にゆかしめ、これを精齋に属す。東^{てん}により精齋を恬す。

一簇＝むらがり
開豁＝広く開いている
兀然＝高くそばだつ
十六所＝浜佐陀附十六ハゲといわれる
鳧＝かも
下日＝落日
氤氳＝いろいろに情形が変化
此勝に若かず＝此勝景にはかなわない
彼＝琵琶湖
此＝宍道湖
略故爾＝大体似たりよったり
微睡＝かるといねむり
墻＝垣根
羞膳＝すすめ供える膳
裁答＝手紙で答える？

恬す＝安心させる

望族＝名門

○主人の西隣木幡久右衛門という者有り。名は質、
 梅屋と宍道の望族なり。字は伯要
 号す
 主人の請により、其山荘に臨む。乃ち、先に寒具一筐を
 贈る。未牌、行蔵導き出で秋香、通玄従ふ。初めて湖上
 を観るに天晴れ、風死し、暖きこと春暮の如く、溶々、
 霧々、湖山相媚、既にして東南に行くこと一丁許、街は
 盡、田際に路して南行に迤く二・三丁、岡脚繚繞田して
 其間に通ず、余いわく、地形を視るに往古湖底なるを疑
 うなりと、行蔵いわく、然り、岩石の際、なお蛤殻を存
 す、某記する所四十年來湖媚涸れ、田を作る者既に数百
 頃なり。路傍の卓木墻の如く稲を以て晒す。左右の岡稍
 高く、稍逼る、中間に平地有り、東西三丁ばかり、南北
 二十間ばかり、即ち、木幡氏別業なり。小門有り、門内
 農家一家、蓋、園を守る者、禾を積み載せて路行す。百
 餘歩にして茅屋を孟宗林間に見る。主人、出て迎ふ。年
 三十四、五ばかり、恭にしてかつ敏、紈袴の習なく引き
 て茶室に入る。狭くかつ幽清にして既に茶を喫し、下り
 て庭を歩す。茶室の前、池有り、方数丈、岡脚直に池上
 より起る、喬木数百章、萬緑中時に黄葉を見る、絶妍、
 微流樹根を排し、石罅より出でて池中に注ぐ、聲、淙々
 として雨の來るが如し。横に小木長さ数尺なる者数百も
 て橋を作る。渡りて岡に入る、青苔滿地寸土を見ず、路

一筐＝一箱
 未牌＝午後
 二時
 風死し＝風
 が隠やか
 溶々＝ゆっ
 たり
 霧々＝おだ
 やか
 相媚＝湖と
 山とが互い
 に連れ添っ
 て
 田際＝田ん
 ぼの中
 繚繞＝めぐ
 って
 湖媚＝湖の
 ほとり
 頃＝広さの
 単位、田百
 畝の称
 卓木＝大き
 な樹
 墻＝垣
 別業＝別邸
 禾＝稲
 茅屋＝かや
 ぶき
 紈袴の習な
 く＝質素な
 衣服
 方＝広さ
 章＝量詞
 絶妍＝この
 上なく美し
 い
 石罅＝石の
 割れ目
 寸土＝少し
 の土
 陡＝けわしい

すこぶ とう
 頗る、陡にして大石屋の如き者を背に、巨樹を載き、或
 は山骨露出するもの数百尺、小池有り、卓木もて間を作
 る。主人いわく、此飛流の源たるや、池小にして水寡く、
 ゆえ いた すなわち はな
 故に平日間を閉じ、客至れば輒これを放つと。側に平地
 を見れば数十歩にして、一小祠有り、其左に岩を鑿、洞
 を作り、石佛三軀を安んず。余 謂、主人のいわく、此
 佛古なりといえども未だ燥湿を経ず、なお新にしてすべ
 からくここに置くべし。洞外苔蒸し、藤纏いて藍をもつ
 て古色なり。然らざれば壺せざるなりと。主人大笑す。
 洞前一碣を立て、南無阿弥陁佛と刻む、側に文化十一年
 甲戌八月六日、九十八人湖に溺して死す、越えて三年此
 に建つと書す。もって冥福を薦む 原邦の文、 行蔵いわ
 く、^{それがし}某当時年十五、なおよく記するが如しと。本日、湖
 北に薬師祭有り、土人舟に乗りて往く。風止み波静かな
 り。舟底に漏る處有れば、舟子脱衣してこれを塞ぐ、板
 すで
 既に腐らば、随って塞ぐや、随って開く、客大いに譟
 ぎ、終に覆活する者僅かに数人、その後三十餘年、八月
 六日、復舟に乗る者なく、今、稍舊に復すと。祠後、坂
 けだし か そうつ
 は蓋急なり、落葉苔に代わりて、萬松簇立す。松根地に
 入る数尺、岩に至って復横出す。身修り葉瘦て、往々瘤
 大にして斗の如きを見る。行蔵いわく、此松常種と異り、
 伐りて板を作る、質密にして堅きこと頗る椀に似る。翠

間＝水門
 壺せざる＝
 長く生きの
 びない

一碣＝一碑

記する＝記
 憶している

覆活者＝生
 き残りの人

簇立＝むら
 がりたつ
 斗＝けわし
 い

翠微＝山の
 八合目

湖尾＝湖の
 終りの方

参差＝入り
 交って
 平地廣衍＝
 簸川平野を
 眺望する

微に至り、宍道を^{かかん}下瞰すれば人家帯の如し。其西湖^{びしん}尾参
 差として平地^{こうえん}廣^{けだし}衍なり。蓋皆新田ならん。絶頂の平地、
 方数十歩、高さ北岡と相若く。皆四五十丈、行蔵いわく、
 此地、古^{いにしえ}瑞雲寺有り、寺^{すた}廢れて二百年來、主人^{らい}氏に属す
 と。余いわく、世間の勝地多く佛所^{よりどころ}の據となす。公独
 り、佛所^{よりどころ}の據有り愉快なるかなと。下りて茶室^{すく}を過る。
 北畔東行すれば傍路^{しゅうろ}棕櫚多く、茶坪^{ちやへい}其下に麦苗を見る、
 東隅^{へい}敝舎有り、屋に材を蔵し茶室後、また一室有り、獨
 樂窩の三字を扁す。土室床なく香花を見る。余問ふ、何
 の祠かと。行蔵いわく、主人の高祖父^{とし}父^{のぼ}寿百歳に躋る、其
 室^しまた百歳ならんとす、国侯夫婦雙寿を以て世^{まれ}に稀な
 る所、屢^{しばしば}臨^{のぞ}みて物を賜^{すて}ふ。既に没してここに祭る。余
 いわく、此地幽静にして匹なし。人をして遐^{かせい}の念を生じ
 しむ。宜^{よろ}しく其れ^そ寿^{じゆ}すべきなり。復^{また}坐す、鳥語山間に響
 き、寂^{せき}として夜の如し、枯葉風ふかずして片々^{へん}として下^{くだ}
 る。秋香いわく、いまだ是^{かく}の如きを見ず、人境^{ちか}を去る邇
 くして深山^にに以たるは、識^しらず、何等^{なんら}の語を作りてすな
 わち相稱^{あひかな}えんやと。余いわく、山靈^{ひびき}鳥語の響一聲は二聲
 と成る、日没するを何如せんと。飯出^{いかん}で用の茶儀^{ほんい}鮮脆^{せんぜい}人意
 に適^{かな}ふ。始め旬飯^{おわ}を食し畢^{また}りて復^{すす}茶を薦む。酉下牌辞す。
 返月^{じゅか}樹罅^とに現わる。山田稻を穫りて後、なお水有り、寒
 光^{びまん}彌漫木影藻の如し。

衍=広々と
 して
 相若く=同
 じ
 勝地=すぐ
 れた所
 茶坪=茶畑
 敝舎=やぶ
 れ家
 扁す=かか
 げている
 室=妻

遐世=長生

片々=ひら
 ひら
 邇=近い

鮮脆=新しく
 柔い肉

酉下牌=午
 後七時
 返月=樹々
 の間から見
 える月光
 樹罅=樹々
 の間

彌漫=てり
 はえて

(九日)

梅屋^{きた}来る。余これに謂^いいていわく、前夜、笛聲を聞く、
 甚^{はなは}だ妙^{たえ}なり。吹く者は誰なるかを問ふと。行蔵老いわ
 く、隣家の主人なり。我いまだ晤^ごせず、公既に其善笛を
 識^しる、今日、肯^{あえ}て我がために一^{ろう}弄せんかと。梅屋いわ
 く、諾^{たく}と、請^こふ復^{また}山^{のぞ}荘に臨まんと。○午前、行蔵導きて
 木幡氏門外を過ぎ、西行して生路を取り、南折して人家
 を過ぎ、墻内田間を出でて、昨日過ぎる所を取り、荘に
 至る。梅屋及び秋香、通玄従ふ。始め坐に就く。僧冲雲
 来^{きた}りて見^まみえ、主人飯を供す。末徹、元恪返る、精斎^{かん}答東
 に恬^{てん}して致す。主人、冲雲と山に登る、主人笛を吹き、
 冲雲鬻^{ひちりき}策を吹く、聲山間に徹し、風起り黄葉乱下して雨
 の如く、良^や久しうして止む。すなわち一絶を賦^{さい}す。茶^あ霏^い
 山雲を逐^ひ、片々として窓より出でて去る。唯^{ただ}
 聞く吹笛の聲。知らず君坐する處。
 既にして主人および冲雲のために作字す。日没し復^{また}飯す。
 主人碧瑪瑙^{あおめのう}の印材^か二顆を贈る。永井元厚^{きたり まみ}来て見ゆ。元厚
 十四年前余の塾に在り。いわく、先生の松江に在るを聞
 き、大昨日往きて候つ。既に及ばず。すなわち謀^{はか}りて明
 日其郷に赴^まかんと。醫生坪内通博なる者来^まり見^まみえ、論談
 紛^{ふん}起^し。戌下牌返る。大坪氏元厚同宿す。○通博来^まり字を
 乞^まふ。○行蔵の族、祠官大坪内記来^まりて見^まみえんことを請
 ふも値^あはず、径寸の瑪瑙一顆を留めて去る。○元厚島屋

晤^ごせず=会
 って(聞いて
 い)ない
 一^{ちよ}弄^{ちよ}
 ともて遊
 んで
 生路=初め
 て通る道

答東に恬^あし
 て=返事を
 簡単に出す

茶霏=茶を
 わかす煙

作字す=書
 を書く
 余の塾=豊
 後国日田の
 咸宣荘をさ
 す
 紛起=乱て
 進まない

戌下牌=午
 後九時

値^{あう}=遇

又四郎九月十二日東を致す。

(十日)

元厚^ま先^まず去る。○大坪内記来^まり見ゆ。○通博来る。○梅屋来る。○行蔵^{さいわ}いわく、今日幸いに風なければ、舟子に命じて公を送りて、莊原に至らんと欲す、何如ぞやと。余いわく幸甚なりと。○駅亭^{たんぶ}に命じて擔夫及び馬夫を出す。通玄をして馬夫^{かん}を監せしめ、先ず発す。午後大坪氏を辞す。行蔵導きて木幡氏へ至る、門外右折して湖上に出で、梅屋、内記送り水滸^{すいこ}に至る、すなわち秋香、元格及び擔夫^{たず}を携^たさえて舟に入る。舟小さく渡舟の如し。天雲り、微風東より至る。余いわく何んぞ帆^なを揚げざると。舟子いわく、謂^{おもえら}く公は貴人にして必ず帆を揚ぐるを喜こばず、唯^ただ盪^{とう}漿^{しょう}するのみなりと。已^すに波浪稍^は洶^{ろう}湧^やす。前日聞^{しきり}く、頻^きに溺死者有ると、皆恐懼^{きょうく}す。

(後略)

(櫻木保先生の御指導により書き下し文にしたものです)

擔夫＝荷を
かつぐ者

水許＝湖の
ほとり

盪漿＝かい
を動かすだ
け

洶湧＝波が
わきあがる
音

恐懼＝恐れる

著 者 紹 介

第1章・第3章 内 田 文 恵 (うちだ ふみえ)

1949年 松江市生れ

国土館短期大学卒

現・島根県立図書館主幹 (郷土資料係長)

著作「角川地名事典・島根県」(共著)「島根
観光事典」(共著)「藩史大事典」(共著)「三
百藩家臣人名事典」(共著)「日本歴史地名大
系」(共著)ほか

第2章 野 津 千恵子 (のつ ちえこ)

1945年 八束郡宍道町生れ

島根大学文理学部文科卒

現在 島根大学附属図書館受入係長

著作「角川地名事典・島根県」

宍道町ふるさと文庫10

宍道を訪れた旅人伝

1996年3月31日第一刷発行

編著	内田文恵 野津千恵子
発行	宍道町教育委員会 八束郡宍道町大字昭和1番地
印刷	柏木印刷有限公司 松江市国屋町452-2

表紙 胡鐵梅筆 水墨山水より（八雲本陣記念財団所蔵）

